

人文研紀要

第34号～第36号(1999年)

◆第34号—1999年(1999年9月発行 A5版193頁)

| | |
|--|----------------|
| Scandalを通して英訳の可能性と限界を見る | Gary W. CANTOR |
| 複文研究メモ(3) —連体節・連用節— | 野田 時寛 |
| 中央大学の留学生に対する文章表現指導についての覚書Ⅱ —授業形態の一部改変と提出物にみる特徴を中心に— | 大高 知児 |
| 促音の指導法について | 飯野 清士 |
| 冥府考 1 | 渡辺 博 |
| フォークロア再論(Ⅱ) —馬琴考— | 加藤 正泰 |
| 国民性論(四) —誕生原理の理論— | 世良 正利 |
| 中国革命と外国勢力 —孫文の対外宣伝(下)— | 深町 英夫 |
| 李朝の交隣政策とその展開 —土木の変期の明・女直・日本との関係を中心に— | 荷見 守義 |

◆第35号—1999年(1999年9月発行 A5版262頁)

| | |
|--|--------|
| クリアランスとゲール語の詩 | 小菅 奎申 |
| 『速歩の短詩』に現れる死者の騎馬行列 —「荒獵師」神話の視点から— | 渡邊 浩司 |
| イエイツの英雄をめぐる幻想 —『ケーフリンの死』覚書— | 木村 正俊 |
| 英国詩人墓碑銘拾遺集(IV) | 岡地 嶺 |
| Emily Brontëの詩 —'No coward soul in mine'をめぐって— | 土屋 繁子 |
| ワーグナーの芸術と思想 —ヴァルキューレー— | 三富 明 |
| 群衆社会の病理 —デュレンマットの『貴婦人の帰郷』論— | 荒木 詳二 |
| ゴヤにおける世紀末性 —『黒い絵』をめぐって(二)— | 小山田 義文 |

◆第36号—1999年(1999年9月発行 A5版212頁)

| | |
|--|-----------------|
| The Place of Opera | Graham BRADSHAW |
| Endlösungen, Menschheitsverbrechen. Zur Genese und Kritik des Genozidbegriffs | Uwe MAKINO |
| 初期ブルシェンシャフト運動と反ユダヤ主義 | 飯森 伸哉 |
| ホーフマンスタールのシュティフター受容 | 戸口 日出夫 |
| ビーダーマイヤー期のヴィーンとヴィーン民衆(1) | 篠原 敏昭 |
| ネストロイ劇における名誉の諸相 —『取るに足りない男』の特異性— | 荒川 宗晴 |
| コスモポリタンとして生きるとは —作家イリヤ・トロヤノフの場合— | 鈴木 克己 |
| 『ヘンリー・アダムズの教育』エピローグ —晩年の10年間— | 岡本 正明 |
| 『自殺クラブ』について | 野呂 正 |